

現代青年論再考

——多元的生活世界における青年社会学に向けて——

比較教育社会学研究室 坂 口 里 佳

A Review of Youth Research :an Introduction to the new Sociology of Youth

Rica SAKAGUCHI

This paper develops a conceptual framework to analyse youth phenomena in the multiple social-world. First, I review the literature on youth and youth culture in Japan from 1970s to 1980s, and point out some important concepts and reformulate them in the new socio-cultural context. Second, I suggest how the concept of identity is reformulated, following a new interpretation of Erikson, and how the process of identity formation is influenced by the changing contexts of socialization. Third, I investigate the nature of these contexts in relation to the development of information and consumption-oriented society and the effects over the identity formation among youth.

目 次

はじめに

I. 現代青年論の批判的再検討

- A. 〈現代青年論〉の誕生
- B. 青年社会学の体系化の試み
- C. 青年期構造の現代的位相
- D. 多元的生活世界における青年社会学の課題

II. 多元的生活世界における青年社会学に向けて

—近年の研究動向より—

- A. 多元的生活世界の基本構造
- B. 多元的生活世界の諸相
 - 1. 社会化空間としてのメディア空間について
 - 2. 社会化空間としての都市空間について
- C. 多元的生活世界における社会化の方向づけについて

結び—〈アイデンティティ〉研究の再提起—

はじめに

近年、「〈大人〉になることを志向しない若者・子ども像」が広まりつつある。このような若者・子ども像を

語る言説には、不安や危惧ばかりではなく、肯定的なまなざしが含まれているように思われる。教育社会学においても、近年〈教育的まなざし〉が脱構築される一方で、子どもや若者の発達や成長を語りにくい風潮がある。しかし若者・子どもが制度化された成長過程にあることに変わりはなく、情報化・都市化・消費社会化が進むなかで彼らの社会化過程がどのように変化しているのかを明らかにすることは、学問的にも実践的にも重要な課題である。

本稿は、現代の若者の社会化のあり様を明らかにするための理論的枠組みの提示を目的としている。前半において、1970年代から1980年代までの青年研究・青年文化研究を批判的に再検討し、それを踏まえて青年社会学の理論的・実証的研究課題を提起する。後半では、現代の〈社会化空間〉の構造と特徴およびそこでの社会化のあり様について、近年の研究動向をてがかりに考察する。この考察を通じて、多元的生活世界における青年社会学のための理論的枠組を構築し、今後の理論的・実証的研究の展望を開きたいと思う。

I. 現代青年論の批判的再検討

A. 〈現代青年論〉の誕生

高度経済成長期を経た1960年代後半、高校進学率が70%を越え、高等教育もマス段階に入った頃、子どもでもなく大人でもない〈若者〉の特異な存在様式が、社会的関心を集めるようになった。長髪やミニスカートといった風俗だけでなく、既成社会に対抗する主張・価値観においても、若者世代と成人世代との断絶が意識された。この好奇心と危惧の入りまじった社会的関心を背景に、〈若者〉の存在様式の学問的説明が必要とされるようになり、以来多くの〈現代青年論〉が産出されてきた。

社会心理学および社会学においては、若者の特異な存在様式は、意識・価値観のレベルでの世代間の不連続として認識された。鮑戸¹⁾は社会心理学の立場から、社会的・文化的規範、政治的・経済的価値、生活意識の三つの領域における意識構造の時代的变化を検証し、「日本的なもの」が残存する一方で、近代的・合理的精神の浸透度、性規範のあり様、職業観およびそれと表裏の余暇・私生活観などの点で大きな変化があることを指摘した。この意識構造の時代的变化が、ジェネレーション・ギャップの基盤であるが、同時に世代や年代の影響が絡み合っていることを正しく認識すべきであると主張した。

他方、高橋や井上、栗原らの社会学者は、若者の特異な存在様式を、単なる世代的・時代的变化の結果としてではなく、青年世代による既成社会・大人社会の矛盾の表現態として積極的に意義づけた。高橋・高田²⁾の青年研究は、アメリカの高学歴青年の「叛逆的青年運動」を事例として、それを「資本主義社会における正当性の危機を直截に表現したもの」と意義づけながら、もう一方でそれを論じることを通じた社会学の「方法論的自省化」を意図したものであった。「本来性」を追求する「叛逆的青年運動」は、青年としての自己アイデンティティの危機と「後期資本主義社会」における社会的アイデンティティの危機が不可分に結び付いた現象であり、それを研究対象とすることは現代の社会構造と自我構造のトータルな分析を可能にするとともに、本来的な社会の構成という「社会学原理論」への途を示すと論じた。

高橋らの議論が先鋭的な青年運動を対象としたのに対して、井上や栗原はより一般的な青年世代のあり様を対象として現代青年論を展開した。井上³⁾は、「社会層としての青年の大きな特徴の一つは、いわゆる『生活の重荷』や各種の社会的義務・拘束から相対的に自由であるという点にあり、それだけ彼らは『現実原則』に支配さ

れる『俗』なる領域を離脱しやすい位置にある」と述べ、R. カイヨワの「聖—俗—遊」図式をもとに、現代青年の特徴は「遊戯性」とであると論じた。そして「俗」なる現実社会からの離脱の一方向である「遊戯性」は、青年の自立および歪んだ既成社会の相対化に寄与するものと捉えた。また栗原⁴⁾は、「高度産業社会に伴う高学歴化とモラトリアム（社会的役割の免除・猶予期間）の延長という土壌に育った〈やさしさ〉価値は、高度産業社会が要求する達成価値・生産価値に原理的に対立する」とし、現代青年の特徴を「〈やさしさ〉価値の内面化」あるいは「モラトリアムの内面化」に求めた。そして現代青年は社会的モラトリアムを閉じてはなお、反社会的な〈やさしさ〉価値を保持し続けると論じた。

これらの社会心理学・社会学における〈現代青年論〉の論点は、次の二つに整理できるだろう。第一は、意識・価値観において既成社会・成人世代と青年世代の間に不連続があるということ。そしてこの不連続の構造的基盤が、成人社会から相対的に分離・独立した〈青年期〉という社会的位置にあるということである。第二は、社会学の青年論に顕著な現代社会に対する批判的関心である。すなわち「高度産業社会（栗原）」「管理社会（井上）」を批判し「本来性を追求（高橋・高田）」する〈若者〉を論じることによって、現代社会に対する批判的議論を展開したということである。

このような〈現代青年論〉とは別の観点から現代の青年現象を論じ、今日の〈青年像〉に大きな影響を与えたのが小此木のモラトリアム人間論⁵⁾である。小此木は、現代社会を批判の対象としてではなく、「モラトリアム人間の心理」を育む文化社会的環境として問題にした。「当事者意識の不在」を特徴とする「モラトリアム人間の心理」は、それまで社会的役割を猶予された〈青年期〉に特有の心性であったが、現代の消費社会・情報化社会においては「社会的性格」として成人世代の間にも広まっている、ということである。

小此木の議論を含めて、以上の〈現代青年論〉によって次の二つの課題が提起されたといえよう。第一に、若者の存在様式の基盤となっている〈青年期〉の構造と特徴を明らかにすること。第二に、新しい心性を育む社会文化的環境の構造と特徴を明らかにすること。前者は教育社会学の青年研究によって考察されたテーマであり、次節で検討する。後者は青年社会学の実証的・理論的課題として残されている問題である。

B. 青年社会学の体系化の試み

教育社会学でも、1970年代以降、新奇な若者の存在様

式に対する社会的関心の高まりに応じて、あらためて「現代青年」を研究対象とする「青年社会学」の体系化が試みられた⁶⁾。社会化論と青年文化論を理論的枠組みとする教育社会学の青年論は、社会批判や現代社会論的な性格は薄く、現代青年のあり様を客観的・構造的に捉えようとするものであった。その基本的論点は、社会的地位としての〈青年期〉モデルの提示と青年期社会化の特質についての考察、そして青年文化の類型化の三つにまとめられる。

まず第一に、教育社会学では〈青年期〉の構造的把握を理論的基盤とする。ここでは〈青年期〉が「大人への準備期」として成人社会から分離され、制度的につくり出された「近代の産物」であることが前提となる。すなわち〈青年期〉とは、職業役割・性役割・道徳的役割を猶予され、これらの成人役割の取得およびそれに伴う態度・行為様式および価値観の習得のための「準備期」として制度化された社会的地位だということである。

第二に、「社会的位置」と「役割」を中心概念とする社会化論の枠組みに基づいて、青年期社会化の特徴として「予期性」と「アイデンティティの危機と獲得」が論じられる。青年期社会化は、成人社会から分離された社会的地位ゆえに、将来取得するであろう成人役割を予期した学習過程、すなわち「予期的社会化」となる。この「役割の予期性」ゆえの未決状態に加えて、それまで所与であった「意味ある他者」の重要性が失われ、新たな「意味ある他者」を選択することになるために、「アイデンティティの危機と獲得」が課題となる、ということである。

第三に、若者の特異な風俗や存在様式は「青年文化」として類型化される。たとえば二関⁷⁾は、成人社会から相対的に独立した〈青年期〉という社会的地位を基盤として若者特有の文化が形成されるとし、それを「青年役割文化」と呼んでいる。これは成人社会と整合的で円滑な役割取得を志向するものである。それに対して現代社会に特徴的なのは、成人社会とは異質な存在様式を志向する「青年局在文化」、および成人社会に対して対抗・脱出を志向する「青年逸脱文化」であるという。これらは、「役割構造の弛緩」した現代社会における青年のエネルギー表現であり、青年に対するカタルシスの機能を果たし、成人役割の取得とともに失われる、ということである。

このように教育社会学では、若者の存在様式の基盤として〈青年期〉の構造と特徴を論じ、前節で述べたような〈現代青年論〉が提起した第一の課題に「近代の産物」としての〈青年期〉モデルという理論的基盤を与えてき

た。しかし、それが現代社会においてどのように変化しているのか、という関心は希薄であったため、情報化・消費社会化の進む新しい社会文化的環境における若者のあり様をどう捉えるか、という第二の課題についての考察は保留になっている。そこで以下では、この残された課題について考察し、青年社会学の理論的・実証的課題をあらためて提起したい。

C. 青年期構造の現代的位相

まずは、社会構造との相互作用による〈青年期〉構造の歴史の変遷を論じた藤田⁸⁾の議論をもとに、先の〈青年期〉構造モデルの問題点を検討しよう。藤田は青年期構造の歴史の変遷を五段階のモデル（〈青年期〉以前、〈青年期の発見〉段階、〈青年期の制度化〉段階、〈青年期の大衆化〉段階、〈青年期の長期化・常態化〉段階）によって次のように説明する。近代化と共に発見された〈青年期〉は、成人社会から分離・保護すべき時期として徐々に制度化されるようになり、学校制度への囲い込みと労働の場からの排除が進むにつれて〈青年期〉が大衆化し、全ての若者の享受するところとなった。さらに現代社会では、高等教育の大衆化と都市化・情報化の進展により、〈青年期〉は実態としてだけでなく、観念としても長期化・常態化している。

このような〈青年期〉構造の歴史的相対化を踏まえて、現代社会における〈青年期〉の特徴として次の二点が指摘される。第一に、労働の場からの排除と学校への囲い込みの結果、若者固有の文化が出現する基盤が用意されたこと。第二に、〈モラトリアム期・準備期としての青年期〉という観念が普遍化し、〈青年的〉であることが許容され尊重される社会が出現していること⁹⁾。この二点をもとに従来の〈青年期〉モデルを検討してみよう。

第一の特徴から、若者の存在様式の構造的基盤としての〈青年期〉の捉え直しがなされよう。従来青年社会学においても、若者の存在様式の構造的基盤として〈青年期〉という社会的地位の特徴が論じられた¹⁰⁾。そしてこの社会的地位を基盤とする規範的な文化として「青年役割文化」が想定され、さらに現代社会における「役割構造の弛緩」ゆえに発生する青年文化が類型化された。しかし藤田の議論においては、青年文化が成人社会に対して同調的あるいは反抗的・逸脱的な諸傾向をもつこともまた、成人社会からの構造的分離ゆえであるとされる。すなわち現代の若者の特異な存在様式は、〈青年期〉という構造的位相を基盤とする現代青年文化のいわば正常なあり様として捉えられるのである。

第二の特徴は、従来青年研究では中心的に論じられ

なかった問題である。現代の若者の特異な存在様式は、成人社会から分離された〈青年期〉を構造的基盤とする一方で、「〈青年的〉であることが許容され尊重される社会」を直接的な基盤としている。すなわち現代の社会化は、〈青年期〉の構造的境界を無効化するような社会化空間の諸力のなかで経験されているということである。したがって、〈現代青年論〉が第二の問題として提起した、現代の社会文化的環境の問題は、換言すれば社会化空間としての現代社会の構造と特徴の考察であり、そこでの、若者の社会化のあり様を考察することが、青年社会学の緊要な課題としてわれわれに残されているのである。

D. 多元的生活世界における青年社会学の課題

以上の現代青年論の再検討を踏まえて、現代の若者の社会化のあり様を明らかにするための課題について考察しよう。まず〈社会化〉論の理論的枠組みを検討する。従来〈社会化〉とは、他者との相互作用を通じた役割学習の過程であるとされてきた。したがってそのあり様は、社会化の主体と社会化の担い手である他者との〈役割関係〉のあり様によって概念化することができる。しかし、環境からの直接的な社会化作用を含む現代の社会化のあり様を〈役割関係〉として捉える場合には、〈他者〉や〈社会化の担い手〉といった概念を拡張する必要がある。なぜなら、現代社会においては、主体に対して社会化作用を及ぼすものとして、人間行為主体や社会化を目的とする制度（学校など）だけではなく、さまざまな情報メディアやそれによって媒介される消費の対象としてのモノ、さらに物理的な環境としての都市的生活空間などが重要性を増していると考えられるからである。したがって、現代の〈社会化〉を考察するにあたって、〈他者〉という概念を、その社会化作用が重要である限りにおいて人、制度、モノを含む概念として使用することにする。

このような多様化した役割関係を基盤とする〈社会化〉研究の概念的枠組みを考察するがかりとして、家族との関連で子どもの社会化状況の捉え直しをした渡辺¹¹⁾の議論を検討してみよう。渡辺は、近代産業社会以前から現代社会に至るまでの「家族における子どもの社会化状況」の変容について五つの類型を示しているが、ここでは「現代社会」の社会化状況についての議論を紹介する。渡辺によれば、現代社会の社会化状況の特徴は、「役割集合の多層的複雑化」である。子どもが直接的なコミュニケーション回路をもつソーシャライザーは、親や準拠集団などの人間行為主体だけでなく、「マスメディアと

いう異質な他者」を含んでいる。このような役割集合における社会化効果は、「要因の連鎖あるいは要因複合の磁場（空間・構造）のなかに見出すことが一層重要となる」。すなわち「状況の制御能」あるいは「構造の制御能」を問うという視点が重要となる、と論じている¹²⁾。

この議論には、現代社会における社会化研究に対する二つの問題提起が含まれている。第一は〈ソーシャライザー〉概念の拡張である。これは先に述べた〈他者〉概念の拡張と同様に現代の社会化を論じるうえでは不可欠である。第二は、状況そのものの社会化作用を問う視点の要請である。この視点には、次元の異なる二つの視点が含まれていると考えられる。一つは、社会化研究者の視点。社会化状況すなわち多層的に複雑化した〈他者〉との関係構造のもつ社会化作用を捉えなければならないという要請である。もう一つは行為者の視点。しつけや教育を行う場合に、要因の複合あるいは環境そのものに対して働きかけようとする行為者の志向を捉えなければならないという要請である¹³⁾。この二つの視点は、社会化研究上の二つの理論的・実証的課題を示唆している。

第一は、社会化空間における他者関係の構造と特徴の考察である。渡辺のいうように、ソーシャライザーが直接的コミュニケーション回路をもつ〈他者〉関係は多層的に複雑化しており、若者は質的に異なる複数のコミュニケーション関係を営んでいると考えられる。したがって、若者と相互作用するさまざまな他者の位置関係を考察すると同時に、そのコミュニケーション関係の特徴を明らかにする必要があるだろう。つまり「若者が誰とどのような関係を営んでいるのか」を明らかにするということである。なお、〈多元的生活世界〉とは、筆者が現代の社会化空間を表現した言葉で、質的に異なる〈他者〉関係を含む多様な社会関係がはりめぐらされた場という意味を込めている。

第二は、〈他者〉関係への志向性を含めた社会的営みを方向づける信念についての考察である。すなわち個々の行為者レベルでの価値志向（たとえば子どもの社会化でいえば、親が子どもの教育環境へ働きかけるときに志向するもの、また若者の社会化でいえば、さまざまな〈他者〉との関係やライフスタイルの選択において志向するもの）を、集合的レベルで方向づけている現代社会の信念は何かということである。

以上の二つの課題は、〈社会化空間〉に向けられた二つの視点から導きだされたものであるが、それに加えて社会化の主体である若者に向けられた視点から、第三の課題を導くことができる。若者は、〈他者〉との多元的な関係のなかで、何らかの信念にとらわれながら自己形

成している。逆にいえば、どのような社会関係のなかで、どのような信念のもとで社会化を経験するのかによって、形成されるアイデンティティのあり様が異なるということである。このように〈アイデンティティ〉を、〈社会化空間〉のあり様を基盤として、さまざまに形成されるものと捉えるならば、その考察は先の二つの課題の関わりを若者の側から捉える焦点となり得るだろう。したがって、若者の〈アイデンティティ〉のあり様を明らかにすることを、第三の課題として提起したい。以上の三つの研究課題を理論的・実証的に明らかにすることによって、青年社会学は現代の若者の社会化のあり様を総合的・構造的に考察することができるものと考えられる。

II. 多元的生活世界における青年社会学に向けて —近年の研究動向より—

前章で提起した青年社会学の三つの研究課題が言及している対象領域は多岐にわたっており、その全貌の解明までは遠い道のりであるが、近年では関連する研究が領域別・個別に行われ、重要な成果が蓄積されてきている。以下では、それらの研究の成果を取り入れながら、先の課題について考察し、多元的生活世界における青年社会学の理論的枠組みの構築をめざす。

A. 多元的生活世界の基本構造

〈多元的生活世界〉における多様な社会化の担い手やコミュニケーション関係の契機は、次元の異なる社会化作用やコミュニケーション関係として相互関連し、何らかの構造をなしていると考えられる。今日でも若者の成長過程は、学校教育との関連で高度に制度化・構造化されている。他方で、その構造的過程を揺るがすような社会化空間が広がっていることもまた確かである。このような社会化空間における他者関係の構造と特徴を考察するてがかりとして、現代の社会化空間の二つの側面の特徴と相互関係を論じた藤田¹⁴⁾の議論を検討してみよう。

藤田によれば、現代の社会化空間を特徴づけているのは、〈学校化社会〉と〈情報化社会〉というコミュニケーション様式を異にする二つの社会形態の交差である。コミュニケーションの基本形はそれぞれ、〈活字的・組織的コミュニケーション〉と〈開放的・画像的コミュニケーション〉である。〈学校化社会〉における〈活字的・組織的コミュニケーション〉は、「知識の分割・系列化」「発達課題の細分化・規範化」「情報のコントロール」「能力アイデンティティの形成」という特徴をもつ。これらの〈学校化社会〉の諸特徴は1970年代頃までに社会

化空間を色濃く支配するようになっていた。他方、〈情報化社会〉における〈開放的・画像的コミュニケーション〉は、情報の「開放性・侵略性」「文脈離脱性・安直性」および「情報発生体の多様性」「『価値ある情報』のコンサマトリー化」を特徴とする。これらの諸特徴は、それが顕著で揺るぎないものになった1970年代以降、学制的な発達課題や情報コントロールを無効化するようになり、二つの教育コミュニケーション様式の矛盾によって人間形成空間に歪みが生じている、ということである。

ここで論じられている、「〈学校化社会〉の諸特徴が揺らぐ一方で〈情報化社会〉の諸特徴が顕在化している」という経緯は、前章で検討してきた青年社会学の展開と対応している。すなわち、若者の存在様式の基盤として、〈青年期〉構造の基本的特徴の考察に加えて、〈社会化空間〉のあり様を解明する必要が生じてきたということである。〈青年期〉の構造的境界を無効化するような〈社会化空間〉の特徴を、藤田は〈情報化社会〉のそれとして論じたのである。現代社会における若者の社会化過程は、〈活字的・組織的コミュニケーション〉に媒介される〈一般化された他者〉との関係を基盤とし、そこで一定の〈発達〉を志向する知識・情報が伝達される。これは構造化された過程である。他方、若者はまた〈画像的・開放的コミュニケーション〉が媒介する〈他者〉関係を基盤に、前者とは異質な社会化過程を経験している。この〈学校化社会〉と〈情報化社会〉の並存¹⁵⁾を、社会化空間としての多元的生活世界の基本構造と考えることができるだろう。

B. 多元的生活世界の諸相

社会化空間としての多元的生活世界は、〈情報化社会〉と〈学校化社会〉の並存を基本構造としながら、さらに〈情報化社会〉の存在を前提として編成されているメディア空間や都市空間が遍在化している。この節では、社会化空間としてのメディア空間と都市空間について、近年の研究をてがかりに考察する。

1. 社会化空間としてのメディア空間について

現代の若者の日常生活においては、さまざまなメディアとの接触が不可避である。多様なメディアの普及を基盤として大量かつ多様な情報が流通し、それらが価値をもち、新しい〈関係〉を媒介している生活空間を、ここではさしあたって〈メディア空間〉と呼ぶ。メディア空間における〈他者〉関係は、大きく二つに分て考えることができる。一つは、情報・メッセージを送ってくる〈メディア他者〉との関係、もう一つは、メディアが媒介する人間行為主体との関係である。この二つの関係を

考察することは、前者においてメディア空間の直接的社会化作用、後者において社会化の基盤となる他者関係を考察することになり、メディア空間を〈社会化空間〉として考察するための基本的枠組みとなると考えられる。これらのメディア空間における他者関係の特徴について、若者のメディア行動と対人関係の分化を分析した宮台らの議論¹⁶⁾をてがかりに考察してみよう。

宮台の議論¹⁷⁾は、メディア行動によって分化している若者の〈コミュニケーション〉の分析に焦点がある。キーワードである〈コミュニケーション〉とは、「前提的信頼を要求する」ものであるとされる。すなわち、相手との間に共有できる問題の存在および問題を処理するコードの存在を信頼できる程度によって、その自由度が決まるものであるという¹⁸⁾。現代の若者は、このような〈コミュニケーション〉の前提不在のために、コミュニケーションする相手を、同一のメディアあるいは同一の記号的消費にコミットメントして、「同一のノリ」をもって期待できる範囲に限定している。つまり若者のコミュニケーション回路は各種の並列的な集団内部に限定されている、ということである。

宮台ら¹⁹⁾は、このような若者のコミュニケーションをめぐる状況の把握を前提に、若者たちが日常的に接触するマンガや音楽などのメディアの内容分析を行い、それらは「コミュニケーション前提の不在」を埋め合わせるためのさまざまな〈関係性モデル〉を提供してきたとして、そのモデルの変遷を論じている。〈関係性モデル〉は、メディアの中に自分と似た存在を見つけて、それをモデルとして周囲の対人関係や出来事を解釈し、現実のコミュニケーションに形式を与える機能を果たす。今日では、誰もが「これってあたし！」と共感できるモデルを見い出せる程に〈関係性モデル〉が多様化し、若者のコミュニケーション関係の維持・分化に寄与している、ということである。

宮台らの議論は、メディア空間における〈他者〉関係の特徴についての示唆に富んでいる。第一に、マンガや音楽といったメディアの内容における重要な領域として、〈コミュニケーション〉様式に焦点化した分析を行い、そのバリエーションを提示した点である。メディア空間の社会化作用を明らかにするためには、こうしたメディアの内容分析をさらに進める一方で、メディアの形態やメディア接触行動の様式に焦点化した研究が必要であろう。〈メディア他者〉による個別的な社会化作用を問うと同時に、メディア空間そのものの構造的な社会化作用を問うということである。

第二に、若者のメディア行動や記号的消費行動の〈分

化〉について。従来の若者とメディアに関する研究は、学校での成績や学校生活への適応度による生徒の分化との対応関係を前提として、メディア接触行動の分化を説明する場合が多かったが、宮台らは、それをメディア空間に特有の要因（ここでは「同一のノリ」）に求めており、従来の研究の相対化に寄与している。メディアを媒介とする対人的コミュニケーション関係の特徴を明らかにするためには、このようにメディア空間での関係の〈分化〉の分析を進める一方で、その関係の〈創出〉、つまりメディアがどのように対人関係を媒介するのかに焦点化した分析も必要であろう。それによって、単なる対人関係の志向とは次元の異なる、メディア空間で生成されるコミュニケーション関係の特徴を示すことができよう。

2. 社会化空間としての都市空間について

現代の若者の社会化空間は〈都市的生活空間〉という側面も持っている。ここで〈都市的生活空間〉というのは、場所的に限定された「都市」ではなく、都市的生活様式を営む空間、すなわち交通網・情報網がはりめぐられ、豊かで快適で効率的なライフスタイルのために整備されている生活空間を想定している。この意味において、ここでは都市的生活空間（以下では単に「都市空間」と記す）の社会化空間としての特徴を、二つの観点から考察する。一つは、都市の空間的編成様式そのものがもつ社会化作用、もう一つは、都市空間の媒介するコミュニケーション関係の考察である。以下ではこの問題を、都市の編成様式とそこに集う人びとの関係性の変遷を論じた吉見の議論²⁰⁾をてがかりに考察してみよう。なお、吉見のいう「都市空間」とは、「盛り場」を意味しており、ここでいう〈都市的生活空間〉よりも限定された意味で使われている。

吉見は〈渋谷的なもの〉としての現代の都市空間の特徴を、「演出」すなわち都市空間の編成様式の側面と、「演者」すなわち都市空間における行為者の側面から次のように論じている。都市空間の編成様式の特徴は「街のセグメント化」と「街のステージ化」という空間技法、すなわち「セグメント化された価値観をもつ人びとを選別し、彼らの自己演出を助けるステージとして街を演出していこう」という考え方に基づいていることである。街は「自分らしさ（「個性」という強迫観念！）が演じられるための舞台として意図的に演出されて」いるのである。他方、そのような舞台としての都市に集う若者たちの特徴は、共在する他者のまなざしに向けて「個性」を演じ合うという関係を営んでいることである。彼らは、特定の「個性」を演じるために用意された舞台において、

「すでに意味を予定された役柄を場面ごとに〈演じて〉いくことで、逆に他者たちとのコミュニケーションのコードを共有して」いる。このような都市と若者の関係の背景には、それまで人びとの営みを方向づけていた価値の相対化状況がある。それまで諸々の事象を意味づける審級として、特定の社会像と結び付いた〈未来〉のイメージが人びとに共有されていたが、高度成長以降の生活様式の変化とともに〈未来〉の単一性が解体し、諸々の事象の意味が浮動化された。そこで1970年代以降、単一の〈未来〉に代わって意味を備給するものとして、さしあたり「同世代・同階層の他者たち」のまなざしが求められ、「それを媒介するのが諸々のマス・メディアなり、都市空間なり」なのである²¹⁾。

この議論をてがかりに、社会化空間としての都市空間の特徴を考察してみよう。まず第一に、都市空間の編成様式のもつ社会化作用について。現代の「盛り場」にはりめぐらされた舞台としての都市という空間技法は、その街の地域的特性とは無関連に定型化・標準化された景観を作り出していると考えられる。そのような景観は、今日では「盛り場」に限らず、商店や娯楽施設、公共施設や住宅地、そしてそれらを媒介する通りや広場などの都市的生活空間の至るところで観察されよう。舞台としての都市空間という特徴は、演じる「個性」の意味が予定されているという点では、行為様式の定型化・標準化を要求するものと考えられる²²⁾。都市空間の遍在化する今日では、都市空間の物理的な編成様式そのものが、特定の行為様式を要求するという意味において、そこで生活する若者に対して重要な社会化作用をもつことが予想され、それを実証的・理論的に明らかにする必要があるだろう。

第二は、都市空間の媒介するコミュニケーション関係についてである。都市における特徴的なコミュニケーション関係として論じられた「演じる－眺める」という関係は、厳密には人間行為主体とのコミュニケーション関係ではなく、他者の〈まなざし〉との関係である。都市空間は程度の差こそあれ、このような匿名的で不特定多数の他者の〈まなざし〉を志向する契機をはらんでいると考えられる。そのまなざしは〈一般化された他者〉のまなざしのように客観的行為基準や規範として機能するのではなく、演じられた「個性」を予定調和的に承認する機能をもつことになろう。しかもこの承認は、究極的には主観的・恣意的な自己自身による承認でしかない。それゆえにこの他者の〈まなざし〉への志向は、〈自己へのまなざし〉の志向に転化する可能性があると考えられる。つまり他者の〈まなざし〉を主観的・恣意的に予期

する傾向が強まるにつれて、それは〈自己へのまなざし〉に解消される可能性があるということである。人間行為主体との関係を志向しないこのような〈まなざし関係〉の遍在化が、若者の社会化に及ぼす影響、また〈まなざし関係〉への志向を強化する現代社会の信念についてさらに研究を進める必要があるだろう。

以上、前章で設定した第一の課題である社会化空間における他者関係の構造と特徴に焦点化し、社会化空間としてのメディア空間および都市空間の直接的社会化作用、そこで媒介される〈他者〉関係の多元的あり様を概観してきた。次節では、多元的生活世界における社会化の主体である若者の存在様式を方向づけている現代の社会的信念(第二の課題)について考察を試みる。

C. 多元的生活世界における社会化の方向づけについて

行為者のレベルでみれば、人びとは個別的で多様な信念あるいは価値志向をもって生活している。そして、それらが意味をもつと感じられるのは、何らかの社会的信念に支えられているからである。現代の多元的生活世界において、若者はどのような信念に基づいて日常生活を意味あるものとして営んでいるのだろうか。ここでは先駆的研究である藤田の議論²³⁾をてがかりにこの問題を考察する。

藤田は、現代は「個性至上主義の時代」であるとして次のように論じる。今日、「多くの公的・共同的な営みに対して、個人の好みや個性を根拠にそれを批判し、個別化・自由化しようとする傾向」があり、その背後にある「個人の好みや個性を最優先すること、その実現を妨げる諸慣行を排除することが道徳的善であるとする信念」が、「多様な社会的営みを評価する基準として人びとを支配しつつある」。個性には、個体の特質という側面、客観的・機能的役割関係の側面、主観的・志向的側面、アイデンティティを左右する側面という四つの側面があり、第二、第三の関係性の側面を媒介にして、アイデンティティが形成され、それらが「個性そのもの」を調整・再編している。しかし現代社会においては、「心理学・精神分析学が自己に関する学問として圧倒的に優勢になるにつれて、またもう一方で、世俗化・都市化・消費の高度化が進み、社会が個人主義的に再編される度合いを強めるにつれて、個性の第二の側面(機能的役割関係の側面)は次第に後景に追いやられ、第三の側面(主観的・志向的側面)が前景に押しだされ」るようになっている。

この議論が示唆するように、現代の〈個性至上主義〉的な信念は社会関係のあり様の変化とともに歴史的につ

くられてきたものである。したがって、前節の多元的生活世界における他者関係の構造と特徴についての考察を、より歴史的・構造的考察へと深めることによって、この信念を明らかにすることができると思う。現代の多元的生活世界が、「客観的・機能的役割関係」を後退させ、「主観的・志向的」な個性を志向させる契機を胚胎していることは、たとえば都市空間における〈まなざし〉関係が〈自己へのまなざし〉を強化するだろうという前述の議論から予想できる。このように〈関係に対する志向性〉という観点から、社会化空間としてのメディア空間や消費空間、都市空間における他者関係の構造と特徴を分析することが今後の課題となろう。

以上、この章では〈社会化空間〉のあり様に焦点化し、その多元的な〈他者〉との関係構造およびそこでの社会的信念という二つの側面から検討してきた。最後に、考察の焦点を若者に移し、先に第三の課題として提起した〈アイデンティティ〉研究の有効性を述べて結びとした。

結び— 〈アイデンティティ〉研究の再提起—

「子どもから大人への移行期」として近代化の過程で作りだされた〈青年期〉は、さまざまな社会的地位の選択・獲得という課題ゆえに、アイデンティティ混乱の契機が構造化されている。従来、この「アイデンティティの混乱」は、諸々の成人役割の取得によって「アイデンティティの獲得」へと至るものとされてきた。しかしモラトリアム人間論によって、現代社会においては成人役割を取得してもなお「アイデンティティの混乱」すなわちモラトリアムの状態が続くと指摘された。このような現代社会における社会化研究の理論的枠組みについて、渡辺²⁴⁾は、「アイデンティティ人間型社会化研究」から「モラトリアム人間型社会化研究」へのパラダイム転換を提唱している。すなわち、従来の社会化研究では、「特定の社会システム」の成員としてのアイデンティティの獲得と持続を前提としていたが、「多元的・変動社会」における社会化研究では、「アイデンティティの絶えざる変化、すなわちモラトリアムの持続」を前提とすることになる、ということである。

このような「アイデンティティからモラトリアムへ」という認識と研究枠組みの移行には二つの背景がある。一つは従来のアイデンティティ理解における問題性である。従来のアイデンティティ理解は、その「獲得と持続」を焦点としていたために、アイデンティティが内包する変化の契機が、社会化空間のあり様との関連において考

察されなかった。このような限定的理解のために、アイデンティティの基盤となる〈社会化空間〉の変化とともに、アイデンティティ概念の限界が指摘されたのだと考える。より実質的なもう一つの背景は、この〈社会化空間〉の変化であり、先に第一、第二の課題として考察してきた問題である。

エリクソンの理論を「人間学」として再構成した西平によれば、エリクソンのアイデンティティ理論とは、常に相対的＝関係的な帰属感に拠らざるを得ない近代的個人を想定した思想であったという²⁵⁾。そしてアイデンティティとは、「〈意識の内部で保証されるアイデンティティ〉と同時に、いわば〈意識の外側〉から保証されるそれ」つまり他者や社会から保証されるアイデンティティであり、そうした二つのアイデンティティのズレを何とかつなぎとめようとする感覚・実感であると述べている²⁶⁾。このようにアイデンティティを「達成・獲得」される静的状態としてではなく、二つのアイデンティティの親和的バランスを保とうとする動的状態として理解すれば、「モラトリアムの持続」もアイデンティティの正常なあり方だといえる。むしろ問うべきなのは、そのようなアイデンティティ形成の構造的な基盤としての社会化空間の変容であると考えられる。

西平のいう「他者や社会から保証されるアイデンティティ」は、個人の成長にもなう他者関係や社会関係の変化につれて、同時にその基盤となる他者関係や社会関係のあり様の歴史的变化につれて、変わると考えられる。後者の、〈他者〉との関係構造の歴史的变化に規定される側面が、従来の静的〈アイデンティティ〉理解において看過されてきた側面である。現代の若者は、対面的コミュニケーション関係や「一般化された他者」との関係に加えて、メディア空間や都市空間との直接的相互作用関係、またそこで媒介される対人関係といった次元の異なるさまざまな〈他者〉関係を営んでいる。若者がこの多元的な〈他者〉関係の中で、どのように自己を位置づけているかを考察・検証することは、第一の課題である〈社会化空間〉の構造と意味を、若者の側から考察することになるだろう。

西平のいう「意識の内部で保証されるアイデンティティ」もまた歴史的に変化するものと考えられる。これは、自己に関する社会的信念によって意味づけられる側面であり、従来の静的〈アイデンティティ〉理解においてはやはり焦点化されなかった側面である。若者が自己をどのような存在として意味づけるかを考察・検証することは、本稿で第二の課題とした現代の社会的信念を考察することになるだろう。

このように〈アイデンティティ〉を、歴史的・社会的に形成される〈他者〉関係の構造と社会的信念を基盤とするものと捉えれば、それは〈社会化空間〉に焦点化した第一の課題と第二の課題を結び付けるための、青年社会学における重要な概念だといえる。このような意味で、本稿ではあらためて多元的生活世界における若者のアイデンティティ研究を第三の課題として提唱したい。青年社会学研究は、およそこのような枠組みに基づいて、現代の若者の社会化のあり様を歴史的・構造的に明らかにしていくことができると考える。

(指導教官 藤田英典教授)

註

- 1) 鮑戸弘「ジェネレーションギャップ」『年報社会心理学』12号 1971年。
 - 2) 高橋徹・高田昭彦「現代世界と青年の自己実現」『岩波講座 子どもの発達教育 6 青年期 発達段階と教育』岩波書店 1979年。
 - 3) 井上俊「青年の文化と生活意識」『社会学評論』 1971年。
 - 4) 栗原彬「現代青年論=やさしさのゆくえ」『思想の科学』11月号 1977年。
 - 5) 小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中央公論社 1978年。
 - 6) 松原治郎, 二関隆美, 柴野昌山らによる一連の青年・青年文化論, 社会化研究である。
 - 7) 二関隆美「青年文化の問題—青年社会学のための序説」『大阪大学人間科学部紀要1』 1975年。
 - 8) 藤田英典「青年期への社会的接近」西平・久世編『青年心理学ハンドブック』福村出版 1988年。
 - 9) 藤田 前掲論文 1988年 p.174
 - 10) ただし、藤田においては職業的役割・性役割・道徳的役割の取得と、それにもなって要求される態度・行為様式、価値観の習得は、それぞれ社会的次元の問題と文化的次元の問題として区別されていることを付記しておこう。前掲論文 1988年 p.150-157。
 - 11) 渡辺秀樹「家族の変容と社会化論再考」『教育社会学研究第44集』 1989年。
 - 12) 渡辺 前掲論文 1989年 p.38-43。
 - 13) 渡辺は、「子どもに対する社会化効果」を「要因複合の磁場」に見出すことの重要性を指摘するにあたって、次のような例をあげている。戦後の「育児書」は、親が育児上で必要とする情報源として用いられたのに対し、最近の流行の「育児雑誌」は、「家族のライフスタイルの情報源として用いられるという性格が強い」。すなわち「自己とソーシャライズーとしての子どもを包み込む状況の制御能に反応して接近している」のではないか、ということである。渡辺 前掲論文 1989年 p.41-42。
 - 14) 藤田英典「学校化・情報化社会と人間形成空間の変容—分節型社縁社会からクロスオーバー型趣味縁社会へ—」『現代社会学研究第4巻』 1991年。
 - 15) 一般に、「学校で教えられた知識とテレビで得た知識のどちらを信用するか」によって子どもが二分法的に論じられることがあるが、このように〈学校化社会〉と〈情報化社会〉との関係がゼロサム的に捉えられるのかは疑問である。藤田のいうように後者の特徴が前者の正当性を低下させていることはあっても、両者は必ずしも対立関係にあるというわけではな
- い。両者が互いに影響し合い、どのような社会化空間として機能するかは、実証的・理論的研究の積み重ねによって明らかにされるべき課題であろう。
 - 16) 宮台真司「新人類とオタクの世紀末を解く 上・下」『中央公論』1263-1264号 1990年。宮台真司・石原英樹・大塚明子『サブカルチャー神話解体』PARCO出版 1993年。
 - 17) 宮台 前掲論文 1990年。
 - 18) たとえば、かつての「団塊の世代」の場合には、相手との間に「共有できる問題」(=共通の外部地平; 大学紛争, ベトナム戦争など)と、問題処理のための「共通コード」(体制/反体制などの二項図式)の存在を信頼できたために、コミュニケーションが可能であった、というような意味合いである。宮台前掲論文 1990年 p.227。
 - 19) 宮台・石原・大塚 前掲書 1993年。
 - 20) 吉見俊哉『都市のドラマトルギー』弘文堂 1988年。
 - 21) 吉見 前掲書 1988年 p.288-321。
 - 22) 都市空間が、行為様式の定型化・標準化を要求するという議論は、筆者の仮説であるが、都市空間については、R. セネット(『公共性の喪失』北山克彦・高階悟訳 晶文社 1991年)の議論に示唆されていることを付記しておく。セネットは、現代の都市が〈建造物と環境の無関連性〉〈移動の手段としてのみ意味をもつ周囲の空間〉〈他人から見られていることゆえの孤立〉という三つの意味で人びとを「孤立」させ、公的領域が無意味だと感じさせるような空間構成を特徴とし、人びとが都市で過ごす方法は、受動的な観客として見知らぬ人どうしとて振る舞うことであると論じている (p.28-38, 64-70, 203-213)。
 - 23) 藤田英典「個性化時代のアイロニー」『MIND TODAY』1992年11月号。
 - 24) 渡辺秀樹「家族と社会化研究の展開」『教育社会学研究第50集』1992年。
なお、渡辺は、もしモラトリアムではなくアイデンティティという概念を使って現代の社会化を論じるならば、アイデンティティは「成員性の複合の固有性や成員性の移行の固有性、もしくは成員性の軌跡の固有性を社会的基盤とする概念」として再定義する必要があると論じている (p.56-57)。この再定義は、変化の契機を内包したアイデンティティ理解となっており、本稿でもこのように理解している。
 - 25) 西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会 1993年 p.241-262。
 - 26) 西平 前掲書 1993年 p.205。

その他の参考文献

E. H. エリクソン『アイデンティティ』岩瀬庸理訳 金沢文庫 1973年。